

第3回 千里LF産学学術交流会

製薬・医科学系企業の担当者を招き開催
研究者10人が成果発表、議論も深まる

第3回となる「千里LF産学学術交流会」を2025年12月1日(月)、千里ライフサイエンスセンタービルのサイエンスホールとロビーで開催しました。製薬企業のほか今回より医科学系企業の担当者も訪れたなか、研究者10名が研究の成果や目標を発表。ポスター展示・懇親会で交流がさらに深まりました。



質疑応答



会場全景

研究助成・支援の対象者10人が
研究成果を発表

はじめに、コーディネーターを代表して、理事長の審良静男が挨拶。本会が学術界と産業界が知見を共有し、双方が新たな視点を得られる機会になればと、期待を寄せました。

次に、当財団の2019年度岸本基金研究助成対象者、および日本免疫学会の「きぼう」プロジェクト(岸本忠三・若手研究者育成事業)支援対象者の10名が講演。所定時間内で質疑応答も行われました。

京都大学の赤嶺綾子氏は関節リウマチについて、病態関与が示唆されるB細胞は三次リンパ構造(TLS)内に集中し、B細胞の局在は末梢性ヘルパーT細胞やDC2分画に規定されることを伝えました。

九州大学の伊藤美菜子氏は、神経修復に関与する制御性T細胞「神経系Treg」の効率的な生成手法で、脳梗塞や筋萎縮性側索硬化症(ALS)など多種の神経疾患の治療法開発を目指すとしていました。

大阪大学の井上大地氏は、SETBP1遺伝子変異による予後不良急性骨髄性白血病を例に、動物モデルを用いたCRISPR・薬剤並列スクリーニングなどによる難治がん治療法の開発を展望しました。

かずさDNA研究所の遠藤裕介氏は、脂肪酸合成酵素ACC1阻害によるマウスの実験的自己免疫性脳脊髄炎、乾癬、関節炎の改善を例示。脂質代謝がTh17関連疾患の治療標的となる可能性を示しました。

東京理科大学の昆俊亮氏は、開発した近接細胞蛍光標識法で、正常-がん変異細胞間の細胞競合マーカーの有力候補因子を複数同定したと報告。初期がん細胞の検出法確立を目標に掲げました。

徳島大学の齋尾智英氏は、ALSの病態をめぐる研究成果として、相分離シャペロンKaryopherinβ2の機能がジペプチドリピートの結合によって阻害されるメカニズムを伝えました。

東京大学の高澤郁夫氏は、成人スティル病、ANCA関連血管炎、パーチェット病の自己炎症性3疾患に共通するFLAME遺伝子群を同定し、既存薬コルヒチンの共通有効性を見出したことを伝えました。

東京大学の竹内春樹氏は、嗅覚刺激による治療を主題とし、嗅覚刺激の長期暴露によるマウスの認知機能改善を報告。アルツハイマー病の進行抑制・回復を促す手法の確立へ決意を表しました。

日時(開催形式) / 2025年12月1日(月) 13:30~17:45(会場のみ)

■コーディネーター / 審良静男氏 千里ライフサイエンス振興財団 理事長
竹田 潔氏 大阪大学免疫学フロンティア研究センター 拠点長

Program

- 関節リウマチ患者滑膜における免疫細胞動態
京都大学医学研究科 免疫細胞生物学教室「きぼう」プロジェクト研究員 赤嶺綾子氏
- 中枢神経系疾患の免疫制御による新規治療法の開発
九州大学 生体防御医学研究所 アレルギー防御学分野 准教授 伊藤美菜子氏
- 遺伝情報の発現機構の理解に基づく血液がんの包括的理解と治療応用
大阪大学大学院医学系研究科病理学講座 がん病理学教室 教授 井上大地氏
- 脂質代謝を標的としたTh17誘導型自己免疫疾患治療の基盤構築
公益財団法人 かずさDNA研究所 オミックス医科学研究室 室長 遠藤裕介氏
- 細胞競合マーカーを用いたがん変異細胞の検出法の開発
東京理科大学 生命医科学研究所 がん生物学部門 准教授 昆 俊亮氏
- タンパク質集合制御に着目した神経難病発症機構の解明
徳島大学 先端酵素学研究所 分子生命科学分野 教授 齋尾智英氏
- 自己炎症性疾患に共通するFLAME遺伝子群の同定と治療戦略の検討
東京大学大学院医学系研究科 内科学専攻 アレルギーリウマチ学「きぼう」プロジェクト研究員 高澤郁夫氏
- 嗅覚の価値と可能性 ~匂いによる認知症の予測と予防~
東京大学大学院理学系研究科 生物科学専攻 分子神経生理学 教授 竹内春樹氏
- 組織再生を促進するデザイナー細胞の開発
大阪大学 蛋白質研究所 細胞機能デザイン研究室 准教授 戸田 聡氏
- ウイルスの細胞侵入阻害機構の構造基盤と構造情報を活用した抗原/抗体デザイン
京都大学 免疫学研究所 ウイルス制御分野 教授 橋口隆生氏

●ポスター展示と懇親会

大阪大学の戸田聡氏は、組織再生へ向けた細胞機能設計について、人工受容体synNotchで細胞間コミュニケーションを設計し、難治性炎症性疾患の治療応用を目指していることを伝えました。

京都大学の橋口隆生氏は、SARS-CoV-2スパイクタンパク質の進化の解析を事例に、多様なウイルスタンパク質の構造解析や抗原デザイン、ヒト免疫応答解析などの取り組みをアピールしました。

「社会に役立つ基礎研究を」とエール
ポスターを前に議論・懇親が展開

全講演後、もう一人のコーディネーター竹田潔氏が、財団前理事長・岸本忠三氏の「基礎研究も社会に役立つものを」との言葉を講演者に伝えるとともに、すべての参加者に深い議論を促しました。



講演後のポスター展示と懇親会

ポスター展示・懇親会では、研究の詳細を興味深そうに聞く産業界の参加者と、親身に応じる講演者の姿が見られました。